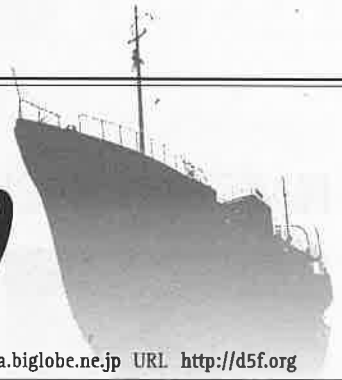


2006.08.01
No.330
(7・8月号)

福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail: fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL: http://d5f.org



写真上左・展示館での特別展、上右「廃船」を観る会、下・祝賀会にて



開館30年特別展開催 記念祝賀会、なごやかに懇談

特別展の開催

都立第五福竜丸展示館では、この日から特別展「写真でたどる第五福竜丸展示館30年」が始まりました。保存運動から一九七六年六月の展示館完成を経て三〇余年の足跡を、写真約五〇点と現物資料一〇〇点によりたどります。

「廃船」観る会と祝賀会

この日午後には、学士会館（神田錦町）において記念行事が催されました。「第五福竜丸の航跡をたどる『廃船』を観る会」（東京都後援、NHK協力）には会場あふれる一〇〇人が参加しました。

今日の第五福竜丸展示館への原点ともいえるべき映像からは、船の保存、被爆国民の原水爆禁止への願いが問いかけられ、参加者は、三七年前の福竜丸と夢の島、船をめぐる

人々のうごきに見入りました。「廃船」上映のあと、番組製作に関わりの深いゲストによる座談会が行なわれました（関連4面）。

*

記念祝賀会は、午後五時から同館にておこなわれ、各界から一〇〇人が参列しました。川崎昭一郎会長、東京都公園緑地事務所長代理の関川人志課長の挨拶、原水爆禁止運動や第五福竜丸の保存に長年貢献された畑敏雄さん（元群馬大学長、協会顧問）と田中里子さん（東京地婦連、協会評議員）による乾杯、各界からの挨拶、なごやかな懇談がつつぎました（関連2・3面）。

また三重県伊勢市大湊の強力造船所関係者から協会にたいして第五福竜丸の船体肋骨模型が寄贈されました（関連5面）。

原水爆のない未来に向けて乾杯

—各界からお祝いの言葉

記念祝賀会は坂野直子理事

の司会ですすめられ、協会の

畑敏雄顧問、田中里子評議員

の音頭で乾杯しました。歓談

中には四月の記念コンサート

で演奏された「ラッキー・ド

ラゴン・クインテット」が流

されました。

関川人志さん

(東京都東部公園緑地事務

所管理課長)

第五福竜丸展示館三〇周年

は、私どもといたしましても

誠に感慨深いものがございま

す。学校など多くの見学者が

いらっしやるとのことでした

へん嬉しく感じております。

夢の島公園の施設どうしが連

携をはかりながら学習の場、

運動の場、レクリエーション

の場として活用をはかるとと

もに、この第五福竜丸展示館

が重要なファクターとして寄

与してくださることをお願い

いたします。

田中熙巳さん

(日本原水爆被害者団体協

議会事務局長)

第五福竜丸は私どもにとつ

開館三〇年によせて

川崎昭一郎

(第五福竜丸平和協会会長)

本日は、東京都立第五福竜丸展示館が開館してから三〇周年の記念すべき日でありま

それぞれの思いをこめて関係ある諸分野で活動され、また現在も続けておられる方々、東京都の担当部局の方々も含め大勢の方々、遠方からの皆様にもご臨席賜っていることをたいへん嬉しくまた光栄に思います。

第五福竜丸展示館に見学に

来られる人の数は着実に増

えており、開館から今日まで

の三〇年間の延べ来館者数は

四二〇万人に達します。開館

当初は一日に三〇人程度の見

学者でしたが、現在では年間

十数万の方々を訪れます。誠

に隔世の感があります。

あらためて第五福竜丸保存のために心血を注がれた先輩諸氏のご尽力を想起するとともに、美濃部亮吉氏をはじめ歴代都知事、東京都の関係部局が展示館開設と維持に行政面からサポートしてくださったことに対して、心からの感謝を申し上げます。

第五福竜丸平和協会の役

員、職員一同が今後も展示館

の初心を忘れることなく、展

示館を大切にし、これを積極

的に活用するよういつそう努

力いたす所存です。皆様の変

わらぬご指導とご鞭撻を心よ

りお願い申し上げます。



ては恩人みたいなところがあ

るんですね。日本被団協が結

成されて今年で五〇年になり

ます。被爆後一〇年間被爆者

は全く放置されていた。こう

したなかで第五福竜丸乗組員

とマグロがビキニで水爆に被

爆する。それを契機に原水爆

禁止運動が燎原の火のように

広がっていき、その中で一人

で苦しんでいた被爆者が初め

て立ち上がって自分たちの要

求をぶつけていくことができ

るようになったわけです。第

五福竜丸の被爆が、私たちの

運動にとって力になった。

第五福竜丸展示館は核の怖

ろしさを首都圏で、多くの

人々に、日本国民全体に、世

界の人々に知ってもらわうじ

ょうに大きな役割を果たして

いると思います。三〇年を迎

えたことは非常に素晴らしい

ことです。これからも平和の

発信源として大きな役割を果

たしていつていただきたいと

思います。

アーサー・ビナードさん

(詩人・エッセイスト)

ビキニ事件を知るきっかけ

となったのは第五福竜丸展示

館でした。東京の英語のガイ

ドブックにもちゃんと載って

いました。

第五福竜丸の資料を読んで

驚いたのは、二三人が水爆実

験を目撃してから、日本に

生きて帰ってこられたことで

す。撃沈されずに焼津に帰れ

たということが不思議でし

た。久保山愛吉さんが無電で

知らせなかったおかげで、彼

等は水爆実験の目撃者、世界

中に放射能を撒き散らしたあ

の実験を見た者として生きて

帰れた、そして語ることがで

きた。

原水爆反対運動が起きなけ

れば地球上には「核の冬」が

(2面からつづく)
おそつていたかもしれないわ
けですね。

さきほど『廃船』を見なが
ら思ったのですが、運動の分
裂がよく語られますが、分裂
したからといって敗北とか運
動がうまくいかなかったと考
える必要は全くないと思いま
す。分裂してみんなが小さな
原子となつていろいろ同じ方
向に動けばいいのであつて、
私たちがここにいて、美味し
いものが食べられて、21世紀
の未来が語れるのはひとつの
勝利であり、これからずっと
勝ち続けていかななくてはな
らないと思います。

大石又七さん (元第五福竜丸乗組員)

今でこそきれになりました
が東京のごみ捨て場、船の墓
場と呼ばれていた夢の島に、
クビ半分水面から出していた
姿を見た時、本当に悲しく思
いました。

でも私はホツとしている部
分もあつたんですね。田舎か
ら偏見の目や差別から隠れる
つもりで東京に飛び出してき
ていたものですから…。

それでもう一人東京に住ん
でいた鈴木さんと一緒に第五
福竜丸を見に行きました。ひ
じょうにポロポロになつたそ
の姿を見て本当に哀れな船だ
なと思ひました。

東京都東部公園緑地事 務所 小川泰和所長のメッ セージ (要旨) (全文は記念 誌「30年のあゆみ」に掲載)

一九七六年、第五福竜丸を
保存しようとする機運が高ま
り、各方面からの要請を受け
た東京都は東京湾埋立地に造
成した夢の島公園に展示館を

建設し、保存展示することに
なり30周年を迎えます。

展示館の見学を通して、平
成の若い世代を中心に、昭和
の時代初期の木造船による遠
洋漁業の実態から、往時の水
産業にかかる学習と、関係資
料による時代を超えて平和を
希求する動機付けに寄与する
ことができれば、施設の設置



その第五福竜丸が平和を思
う皆さんの力で陸に引き揚げ

られ、現在の展示館という形
でのこされることになつたこ
とを、最初はヘンな目で私は
見ていましたが、その存在価
値、意義というものが徐々に
わかつてきて、今では船の「味

者として幸いであると思いま
す。

展示管理業務をお願いして
いる財団法人第五福竜丸平和
協会が独自に収集保存した貴
重な資料等収蔵品とともに、
都立公園から発信する社会学
習への効果に期待します。

方」になつて展示館に通い昔
の話をするというように、変
つていきました。

最近、学校などで話をして
いて感じるのは、この「ピキ
ニ事件」が忘れさられてしま
つているということです。若
い人たちが知らないのは当た
り前ですが、年配の方でも当
時のことがほとんど記憶にな
いんですね。ですからこの展
示館が大事な役割を果たして
いると感じます。

私もこれからも積極的に展
示館に関わつて、特に子ども
たちに、理不尽なピキニ事件
を訴えていかなければならな
い。ピキニ事件は過去の事件
じゃないんです。現在も続い
ている、これから解決してい
かなければならない問題が山

積みになつていきます。皆さん
も若い人たちに伝えていつて
ほしいと思つています。

* このほか、立命館大学国際
平和ミュージアムの桂良太郎
副館長、主婦連合会の兵頭美
代子会長、元強力造船所の強
力修社長が挨拶されました。

最後に藤田秀雄協会副会長
がつぎのように閉会と感謝を
述べました。

展示館の役割はますます大
きくなつていきます。展示館が
あることでいろいろな方々の
原水爆に関する貴重な資料が
集まり、話をしていただいた
りする。それによつて私ども
の展示館が豊かになることを
たいへんありがたいと感じて
います。

同時に私たちは原水爆をな
くしていくという使命があり
ます。多くの平和を願う人た
ちと力をあわせ、今までは
違つた新しい覚悟と行動の形
を開拓することにも努力しな
ければならない。展示館を維
持し発展させ、ご期待に応え
ていくために今まで以上のご
協力をお願いしたいと思います。



「廃船」を 観るつどい のトークより

NHKのドキュメンタリー番組「廃船」(一九六九年三月放送)の上映後、この番組を撮影した葛城哲郎さん(大阪芸術大学非常勤講師)、工藤敏樹ディレクターの後輩桜井均さん(NHKエグゼクティブ・プロデューサー)、工藤爽子さん(工藤敏樹さんの妻)によるトークが行われました。その模様を工藤さんにまとめていただきました。

葛城哲郎さん

「廃船」は工藤ディレクターと他の番組も作りながらかなり長い時間をかけて追いました。ビデオカメラなどない時代ですから、重いカメラと録音機を持って一人でいろんなところに行きました。

当時の夢の島はゴミだらけで臭くて大変で、ゴム長でな

いと歩けません。船はとても危険な状態で、撮影には二人組んで行くようにしました。立ち入り禁止でしたから、隠れて入って、苦勞して撮った映像です。あれは下見の時だったか工藤さんは「いつかここに草が生えて鳥が飛んで、観光バスが来る」と言いました。だが、あの時からラストカットを考えていたのではないかと思います。

取材を始めるころ工藤さんから、「今度核の問題をやりたいので、ちょっと勉強しておいてね」と、国連のウ・タント事務総長の日本語版「核



桜井さん

葛城さん

工藤さん

兵器白書」を渡されました。すぐにとりかかりたかったのですが、「今さら『核問題』でもないだろう」との雰囲気。局内にあつた時期でした。

「乗組員全員に会ってくださうように」と言われ、「現場に行き、そして人に会う」ことが大事だと教えられました。また工藤さんが「シンボルとは何かを考えつけてきたのではない」と言っていたことも覚えています。

現在、私が勤務している大学の放送学科で学生に「廃船」を見せませんが、中学の修学旅行で展示館へ行つたという学生が意外に多い。船を実際に見た学生は、一歩踏み込んだ感想を持つている。同時にメディアの持つ役割というものを、若い人に接して強く感じています。

その後私はドラマ製作に移りましたが、ドラマをやっている時も、「廃船」の方法は体にしみついていて、映像を見てあらためて思いました。

桜井均さん

私は「廃船」が放送された年に、NHKに入りました。

たな」という、逆のベクトルが働く番組だと思います。

工藤爽子さん

夫は九二年に亡くなりました。「廃船」は三六歳の時に三一歳の葛城さんと組み、二人で編集もしています。

この番組に関して残念がっていたのは、第五福竜丸は被災した一九五四年の八月二日に焼津から東京湾へ曳航されたのですが、そのシーンがなかったこと、それをたびたび口にしていました。

番組を見て私あらためて思ったのは、工藤さんは核廃絶を強く願っていた人だったということ。コメントは前に前に向かって書かれていて、決して「保存しましょう」とは言っていない。残すと安心して忘れてしまうから。

その意味で第五福竜丸は、イデオロギーの対立やいろんなものを削いで削いで、やっぱり夢の島に傾いている存在で、見る人にいろんなものを自分で付け加えていくことを求めた、番組としては非常に忍耐を要求されますが、見終わると「ああ、残してよかつ

どの番組でもそうでしたが、取材でお世話になった方たちを大切にしていました。中でも印象に残っているのは乗組員の吉岡(旧姓鈴木)鎮三さんで、年賀状は続いていました。大石又七さんによると、被爆直後に東京へ転院させられた時から「裁判で決着をつけるべきだ」と訴え、仲間内からも白い目で見られ、その後行方不明だったといえます。ところが八二年に二三子夫人から、「六月に交通事故で亡くなった」との連絡がありました。どなたも知らなかった悲しい知らせでした。

第五福竜丸の船体肋骨模型が寄贈される

——大湊の元強力造船所より

第五福竜丸は被災後、残留放射能の検査を経て、一九五六年五月に東京水産大学の練習船「はやぶさ丸」に改造されました。改造は三重県伊勢市大湊の強力造船所でおこなわれました。

六月一〇日の記念祝賀会には元強力造船所の関係者五名が参加、「はやぶさ丸」の設計をした船大工の木村九一さんが製作した第五福竜丸の肋



木村さん(右)と橋本さん

骨模型(三〇分の一)がご本人から協会に寄贈されました。

この模型の制作は、昨年十一月にボランティアの会が研修旅行で強力造船所跡を訪ね強力造船所の元社長(現・ゴリキ社長)の強力修さんや強力淳さん、木村九一さんと交流したことが、肋骨模型製作のきっかけとなりました。

祝賀会では強力修さんが挨拶、翌朝、一行五名は模型を持って展示館を訪れました。

◆強力修さんの挨拶より

強力造船所の創業者の強力善次は、いわくのある第五福竜丸の改修の引き取り手がないうなかで、男気を出して引き受けたという話になっていますが、実は当時仕事がなく、しかも第五福竜丸であること知らずに引き受けたようです。しかしマスコミも書きまして、夜中にこっそり入れよ

元第五福竜丸漁労長 見崎吉男さんが手記 『千の波万の波』発刊

をコピーして綴り、事件年譜の表記の修正を焼津市当局に求めたこともある。

事件から半世紀の二〇〇四年から、「事件とその時の航海の本当の話を残す大切な機会」と記録や随想、思い出などを整理し、記録を残すようにと励ます知人らの協力を得て、一冊の本にまとめる準備を進めてきた。

第五福竜丸は当時、日本中を巻き込んだ放射能禍の元凶のような扱いを受け、乗組員は調査や報道による偏見や無理解に深く傷ついたという。

見崎さんは第五福竜丸の最高責任者として、無線長久保山愛吉さんの妻すずさん(故人)とともに原水禁運動の象徴的存在とされ、政治的に翻弄されながらも地元で平凡に生きることに努めてきた。

著書では「海」「核」「波」など七つに大別し、漁船員のお話できますことを嬉しく思います。

*

強力造船所関係者からは、模型のほかに「はやぶさ丸設計図」、第五福竜丸と同型の

心情や核実験による被災体験、原水禁運動、苦楽をともした母やすずさんへの思いなどの自分史を綴っている。知人の画家による挿絵も入れて子どもにも伝える工夫をした。

見崎さんは「過ぎ去ったことをしっかりと見つめてさまたまな困難に打ち勝つことは、未来を切り開くためにぜひ必要なこと」と記している。焼津市主催の「6・30市民平和集会」で挿絵展と同書の一部朗読も企画されるなど話題を呼んでいる。

平和への熱い思いが伝わる一冊。事件とその後の人生について元乗組員の方々の受け止め方はさまざまのようだが、どんな形であれこうした手記を残していただけたらと思う。(C)

「マグロ船設計図面」などが寄贈されました。なお、肋骨模型は、秋からの特別展「木造漁船・第五福竜丸とその大補修展」(仮称)にて展示されます。

展示館開館 30年にあたり 記念誌を出版

開館30周年記念誌『第五福竜丸展示館30年のあゆみ』(B5判一五六頁)が出版されました。

本誌冒頭の写真ページでは、夢の島に放置された第五福竜丸、保存運動、船体浸水、美濃部都知事と協議、船体陸揚げ、展示館の開館から企画展示や市民団体による催しなどで展示館の30年をたどりま



の第五福竜丸展示館」(川崎昭一郎会長)では、30年のあゆみを総括的に紹介し、今日の活動と将来に向けての展望が提示されています。

「第五福竜丸と展示館のあゆみ」と題する年表は、第五福竜丸と展示館の詳細な歴史と核開発と核廃絶へのうごきなどが示され、資料としても活用できます。

座談会は二部構成で、第一部「第五福竜丸保存から展示館の建設へ」は、保存のために動いた地元江東の取り組みや保存運動当初に関わった原水爆禁止運動の当事者、ジャーナリストなどが、エピソードなども紹介しながら語っています。

第二部「開館から今日まで市民とともにあゆむ展示館」では、展示館の役割、市民団体による催しの歴史、来館の学生たちにビキニ事件を語りつづける元乗組員の大石さんや、日常的に展示館でのガイドをおこなうボランティアの会のメンバーが、展示館活動の現状と今後の課題などについて語り合っています。

また、焼津・広島・長崎の

市長をはじめ第五福竜丸の見崎吉男漁労長、久保山みや子さん、大石又七さんをはじめ各界から一〇九人のメッセージやコメントが寄せられています。「福竜丸だより」に掲載された一五氏の随想も採録しました。

来館者から寄せられている多くの感想文からも一二〇編が収録されています。

協会では、展示館の活用をいっそう広げるためにも本誌の普及をよびかけています。頒価は一冊八〇〇円(送料二〇〇円)です。

ヒロシマ・ナガサキ被爆者の声 伊藤明彦氏より寄贈

長年にわたり被爆者などの証言記録に取り組んできた「被爆者の声を記録する会」(代表伊藤明彦)よりCD作品「ヒロシマ・ナガサキ 私たちは忘れない」(9枚組 8時間 40分)が寄贈されました。会では平和運動団体、平和資料館、大学等に寄贈するとともに、インターネットでの配信も行っています。ホームページ「被爆者の声」<http://www.geocities.jp/s20hibaku>

私たちの 第五福竜丸

横浜市従退職者会会長
森田謙一

ポスター、三角錐募金箱、「情報」、機関紙「横浜市従」—これらは第五福竜丸保存、展示館の建設に向けた私たちの足跡のほんの一部である。

私たちの組合では、保存運動の呼びかけにこたえて、市役所職員への募金を七一年に開始。同時に署名と街頭募金も横浜の繁華街伊勢崎町で訴えた。「花の種」や「風船」に「第五福竜丸保存!」と印刷し、市民に手渡した。これは喜んで受取ってもらえた。被爆の証人としての第五福竜丸へ、私たち自身も夢の島を訪ねたりもした。

これらの取り組みは原爆被災者救援・同援護法制定の行動とあわせて進められ、横浜市役所の民生局へ、衛生局へと被爆者への援護と病院での

被爆者検診と同時に医療従事者を広島・長崎の被爆者の入院先へ研修に送り出した。こうした行動は被爆者への救援はもとより第五福竜丸保存の重要性を大いに広めることになっていく。つまり3・1ビキニデーと平和行進、加えて原水爆禁止世界大会を恒例の行事だけに終わらせない平和への思いを養っていくことに繋がっていく。

だから展示館開設後は被爆者を講師にマイクロバスで年一回、第五福竜丸を訪ねる。むろん被爆マグロを泣く泣く埋めた三浦市職労やご当地の都職労江東支部との交流、国会請願など懐かしい記憶もある。アメリカのいいなり、世界のどこへでも自衛隊を派遣する日本、危うい平和の中にいる私たちにとって、第五福竜丸の展示館運動の一層の広がりを願ってやまない。



マーシャル諸島・核実験被害六〇年②

―広がる被ばく、無視される被ばく―

豊崎博光

一九四六年から五八年まで、アメリカがマーシャル諸島で行った六七回の原水爆実験の総爆発威力は約一〇八メガトン（広島型原爆を一五キロトンとすると約七二〇〇発分）で、甲状腺に影響を与え、放射性ヨウ素の放出量はチエルノブイリ原発事故の放出量の約一五七倍の六三億キュリーである（一九九八年、米疾病対策センター報告）。

しかしアメリカはこの事実を隠しつづけ、一九八六年にマーシャル諸島政府と結んだ自由連合協定でビキニ、エニウエトク、ロンゲラップとウトリック環礁住民に補償金として総額一・五億ドル、被害住民の保健医療費として三〇〇〇万ドル、住民個人の被害補償と島々の損害賠償費として四五七五万ドルを支払うとした。これらの補償金などの支払いは一九八七年に始まり、二〇〇三年に終了した。

同年、マーシャル諸島政府はアメリカと新自由連合協定を締結したが、新協定には新たな核実験被害の補償金支払いは含まれておらず、今日にいたっている。

二〇〇〇年九月にマーシヤ

ル諸島政府が追加補償の請求を行ったなかで緊急に必要なものとしたのが、個人補償と島々の損害賠償額を裁定し、支払いを行っている「核賠償請求裁定委員会（NCT）」への資金供給である。

NCTは核実験による個人の健康被害として三六のガソリンと疾病を設定し補償金を支払っている。二〇〇五年五月時点で、一九三六人の被害を認定し総額約八七〇〇万

ドルの支払いを決めているが、約一六〇〇万ドルが未払いである。島々の損害賠償請求に対しては二〇〇一年五月、二三回の原水爆実験が行われ、故郷の島を失ったビキニ環礁住民の損害額を約五億六〇〇〇万ドルと裁定したが、二三〇〇万ドル余りを支払っただけである。四四回の原水爆実験が行われ、故郷の島の北半分を失ったエニウエトク環礁住民には裁定した損害額約三億八〇〇〇万ドルのうち一六〇〇万ドル余りを支払っただけとなっている。

NCTの広報主任ビル・グラハムは「認定した個人の被害補償受給者のうち約半数が完全な支払いを受けないまま亡くなっている。一方で被害補償請求はいまも受け付けているが、補償金の資金が底をつき支払いができない。島々の損害賠償もビキニとエニウエトク環礁以外にロンゲラップ、アイルツク、リキエツプ、メジット島など一一の環礁・島の住民が請求しているが、資金がないために請求額の裁定を停止している。アメリカは自由連合協定で、核実験に

よる過去、現在、将来の被害を補償する」としたが、わずかな補償資金では過去の被害の清算もできない。追加補償請求は協定で決められた正当な権利であり、早急に支払われるべきである」と言った。

NCTからの損害額支払いを諦めたビキニ環礁住民は二〇〇六年四月一日、未払い金に利子を加えた約七億二四〇〇万ドルの賠償請求訴訟を、翌一二日にはエニウエトク環礁住民が約四億二〇〇〇万ドルの賠償請求訴訟をアメリカに対して起した。

ビキニ環礁で戦後初の核実験が行われてから六〇年。アメリカは六七回の原水爆実験によるマーシャル諸島住民の被害をいまなお無視している。

（フォト・ジャーナリスト、第五福竜丸平和協会専門委員）



ヘリオ・ケベンの妹メリーが亡くなった。プラボー実験の死の灰をあびたロンゲラップ環礁住民86人のうちの51番目の犠牲者だった。墓は仮のもので、故郷ロンゲラップに戻った時、再び埋葬して墓石に名前を刻むとノリオはいった。マジユ口島2006年4月撮影・豊崎博光



小川岩雄先生を偲んで

第五福竜丸平和協会会長 川崎昭一郎

小川岩雄先生は6月13日、84歳で亡くなりました。

立教大学名誉教授であり、湯川秀樹、朝永振一郎両教授とともに第1回バグウォッシュ会議に出席されました。

第五福竜丸平和協会では顧問でしたが、少し前までは、理事を18年間務められました。三宅泰雄前会長の意を受けて理事就任のお願いに伺ったときのことを今でも覚えています。

私は大学院生のとき、専門研究やKJR（「研究情報連絡機関」、科学者の社会的責任に係る情報・意見交換の場）の関係で、立教大学理論物理学研究室に出入りすることが多く、水爆実験による放射能被害のこと、バグウォッシュ会議の誕生、などで小川先生と語り合う機会に恵まれました。

小川先生は学究肌の方でしたが、市民運動などから距離を置くというよりも、求められればできるだけ関わりを持ち自分から提供・貢献し、ご自身も学んでいくというスタンスを買われました。規模の大小に関わらず、講演会・勉強会には必ずよく準備したレジュメを用意・配布され、恩恵を受けた組織者は多かったに違いないと思います。

第五福竜丸展示館内の展示パネルの文章やパンフレット内の文章表現にも気を配り、手を加えられたことも度々でした。協会の講演会での講

師や『福竜丸だより』への執筆も、急をお願いする場合もいつも快く引き受けて下さいました。

科学者の立場で原水爆禁止問題にご一緒に取り組むことが多かったのですが、とくに広島・長崎原爆投下30周年の機会に「核兵器の禁止を願う科学者フォーラム」を立ち上げた際には代表委員を務めていただき、事務局長を担った私にとっては、何でも相談にのっていただける良き頼りになる先輩でした。

私が千葉大学在職当時、同僚から学内で核兵器問題の講演会をしたいとの相談を受けたとき、小川先生はすぐに講師を快諾され、学内の一般教員・学生に大変感銘深い充実した話をして下さいました。それがもとで千葉大学内にも「核兵器廃絶を考える教官有志の会」が生まれました。

第二次世界大戦末期から戦後にかけての荒廃した時期のなかで青春を迎えられ、困難な条件を乗り越えられ、生涯を学問とともに核兵器禁止と世界平和を目指す活動に捧げられた優れた先輩に改めて敬意を表します。

心からご冥福をお祈り致します。



ライナス・ポーリング教授夫妻とともに 在りし日の小川岩雄先生(後列左より3人目 1959年 前列左より2人目が筆者)

船体をかこむ ヒューマンチェーン

京都市立大原野中学校では「私たち

は戦うために 悲しむために生まれてきたんじゃない」と書いた色紙の展示館に贈呈と、全生徒で船をかこむ「ヒューマン・チェーン」が行われました。「今の私たちには戦争をとめることは

できませんが、戦争や核のおそろしさを伝えることならできます、はじめは少人数でも10人、100人と増えていったら何か変わると思っています。」とのメッセージが届けられました。



*写真 大原野中学校提供

ヒロシマデー・ナガサキデーにむけての取り組み始まる

6月9日「反核平和火のリレー」(日本青年学生平和友好祭東京実行委員会主催) 6月24日日本山妙法寺の平和祈念行脚、7月18日ピースサイクル2006が広島に向け出発しました。

展示館内でも8月中旬まで広島・長崎の被爆写真展示、関連書籍の紹介などを行います。



訃報 米内達成さん

ボランティアの会創設メンバーの米内達成さんが6月18日急逝されました。

ビジュアルルームの設営をはじめ、2004年リニューアル展示の設置などに尽力され、広島の被爆者として自身の体験をまじえてのガイドもされました。ご冥福をお祈り申し上げます。